

ここから、こんにちは。壇上にいる方がよいですね？

このように、いつもが挑戦です。私はいつでもどこでも、こういうことを乗り越えなければいけません。これこそが、私を「障がい者」にしているのです。

7か月前、女性会議に出席するため、デンマークのコペンハーゲンを訪れました。障がいをもつ女性の問題について話すためです。

私が泊まったホテルは完全にバリアフリー化されていて、鏡さえも私の顔が見える高さでした。そこではすべて障がい者が利用できるようになっていました。

「障がい」を感じることはありません。

自分の車いすですどこへでも行くことができ、「持ち上げられる」こともありませんでした。建物、公衆トイレ、会議室、交通機関、投票所、どこも車いすの人にやさしい造りになっています。

しかし、これは私の国ではそうになっていないのです。私の住んでいるネパールの首都カトマンズは、バリアフリー環境は整っていません。

私たちは日常的に主に二つの課題に直面しています。1つは身体的な「障がい」、もう1つは精神的な障がいに対する「誤解」です。

私たちは建物、交通機関、道路、トイレなどの整備の欠如のため、教育や職業参加などのさまざまな機会を奪われてきました。

私たちは哀れみと救済の対象として見られています。また無能で役に立たないものと思われています。

また障がいを持つ女性というのは男性の2倍、軽んじられています。まず、障がい者として、次に女性としてです。特に障がいを持たない人々から女性として受け入れられません。

驚くことに、多くの差別は女性から受けるのです。「抑圧された性」（女性のことですが）から私たちは抑圧されているのです。なぜなら私たちは世にいう“女性”のイメージにはあてはまらないからです。

私は何度も人々の同情の声を聞いてきました。「あなたは美しい、でも車いすだ」「とてもかわいそう」彼らがなぜ「かわいそう」というのか私にはわかりません。

どうして笑顔でいられるの？どこからその明るい気持ちはやってくるの？と幾度となく言われてきました。私はただ車いすに乗って笑っているだけです。

ある人が興味深い話を教えてくれました。聖書やほかの神話では、障がい者には天国での居場所がないと言うのです。なぜ、私たちには天国での居場所がないかを考えました。

最近はグーグルでなんでも見つけられる時代です。私はグーグルでこの天国への階段という絵を見つけました。そしてなぜ私には天国での居場所がないかがわかりました。天国への道はバリアフリーではないからです。

障がいというのは何か悪いもの、役に立たないものと見なされています。ネパールでは前世の償いとみなされています。

皆さんは、なぜ私が車いすなのか気になっているでしょう。

3歳の時、家族でバス事故に遭いました。そこで家族を失いました。私は生き残ることができましたが、脊髄損傷を負いました。

5歳の時、幸運にも SOS children village に行くことができました。そこは障がいをもつ子どものための施設です。そこで新しい家族、そして新しい車いすと出会うことができました。

新しい家は完全にバリアフリー化されていて、すべてのことが自分の力でできました。自分が障がい者だと感じることはありませんでした。

しかし私は家に閉じこもるのは嫌でした。他の子どもたちのように、学校に行き、外で遊んで、色々な活動に参加したかったのです。

しかし不幸にも、私にはそれができませんでした。私の学校はバリアフリーが整っていなかったからです。家で勉強するしかありませんでしたが、授業に出席せずにテストを受けるのはとても難しいことでした。

こんなことから、私は自分の障がいを恨み、車いすの自分を嫌いになりました。10代の頃、私は全く自信を失い、そして落ち込んでいました。

しかし SOS の家族に助けをもらい、学校を卒業することができました。

高校生の頃、私もほかの女の子と同じようにモデルになりたいと思っていました。しかしモデルと言うのは間違いなく魅力的で、いわゆる「完璧な身体」を持っているものとされていて、人々に私は受け入れられないだろうと思っていました。まあ、私は自分を完璧な身体だと思っていますが。

嬉しいニュースが飛び込んできました。私はモデルとして採用され、写真をウェブで公開してくれたのです。数日して、私はいくつかインタビューの依頼を受けました。私は初めての車いすモデルとして知られるようになりました。

私は自信を取り戻すことができました。そしてこの機会を障がい者の人権を主張するために使います。

私は、施設の家族や友人の、色々なサポートで消極的な態度を乗り越えることが出来てラッキーだった。それで様々な機会に出会うことが出来て、幸運だったと思います。しかし一方では家族から差別されたり、軽視されたり、過保護にされたりしている人もたくさんいます。多くの人が落ち込み、孤立しています。

私は私と同じような経験をしている人をたくさん見てきました。何もできないと思われがちですが、多くの人が自信を向上させる機会を探しています。

だからこそ私は、障がい者が哀れみと救済の対象として見られない世界を望んでいます。

障がいのある人もない人も協力し合い、笑い合い、仕事をして、自分の人生を精一杯生きる場所にカトマンズが変わるのが私の願いです。

私は障がい者の人権問題に取り組むネパールカーナ財団で働いています。私が推進している「変革を受け入れよう」はカーナ財団のプロジェクトの一つです。刺激的でユーモアのあるメディア広告を通して車いすの人々の人権を主張しています。

まだ世の中には、車いすの人は誰かの助けを借りなければ日常生活のことも満足にできないという誤解があります。どうやって料理するの？どうやってシャワーを浴びるの？などよく聞かれます。

人々は車いすの人はとても難しく、とても違う生活をしていると信じ込んでいます。この思い込みは、車いすの人々と社会との関係を制限しています。

私のプロジェクトの中で、車いすの人がいろいろなことができるという姿を動画にしてユーチューブ、フェイスブック、インスタグラムにアップロードする予定です。障害があることと、何かが出来ることとは別であることは明らかです。これらはまた、政府に障がい者の尊厳ある生活とバリアフリーの社会を導く法令や政策を実行させることにつながると思います。

私は「車いすに縛り付けられている」ということを聞き飽きました。新聞でも「車いすに束縛された」という言葉を見ます。

多くの人はこの車いすを「障壁」だと思っています。全く違います。車いすは私にとって「障壁」ではないし、私も車いすに縛られているわけではありません。

その逆で、これは私の自由のための道具であり、私を大事に育て、そして世界へのトビラを開けてくれるものなのです。

7か月前、デンマークで気が付きました。全世界がデンマークのようだったら、私は「障がい者」ではなくなるのです。

ご清聴ありがとうございます。